

白くない。この際鉄鋼協会は全面的に軍に協力して戦局打開に些かでも貢献しなければならん。君は軍の研究所におるのだから、軍の内情をよく知っている筈だ。協会のことをよろしく頼むよといわれた。当時軍の研究所としては協会の多数の方々のご援助を仰いで急速な開発研究に献身的なご努力をお願いしておつたのであるが、さて協会のこととなるとそれ以上の重荷であつた。会員諸君の貴重な論文は沢山あるのに用紙の配給は激減されるし、印刷能力は益々不足、その上会費の集まりは予想外に悪くなつて、協会の悩みは並大抵ではなかつた。会長は故吉川博士であつたが、これには随分頭を悩まされた。しかし貴重な論文は何としても発表せねばならん、役員各位奮励努力せよとは言われなかつたが、皆一生懸命で

あつた。幸い会誌の発行もつづけることができ、また地区毎に論文の発表が盛んに行なわれたのは何より喜ばしいことであつた。その当時の会誌といえば、ザラ紙 24~26 頁位のもので、図表写真を主として要点を簡潔に記述し、表紙までも利用したものである。今その会誌を見ると全く感慨無量である。あの丸の内の赤れんがの建物、燈火管制下の夜空にうす暗く浮び上つた高い建物の一室で、役員の方々とともに協会の使命達成に努力し、聊かなりとも俵先生のご信頼に答え得たかと思うと心の安まる思いがする。《筆者は、昭和 19 年 4 月から 20 年 2 月地方へ転住するまで副会長、現在日本パーカライジング株式会社大阪熱処理(タフトライド)工場長》

(正会員・元副会長)

日本鉄鋼協会創立当時を回顧して

長谷川熊彦

私は、かような題で執筆する資格も能力もありませぬが、ご指名を光榮として紙面を汚すこととなりました。強いて申せば、私が命長く生き延び本年(昭和 39 年)3 月で満 81 才に達し、明治 42 年東大卒で 6 年前に 50 周年同窓会を椿山荘で開き得、日本鉱業会から 50 年以上の会員優遇として数年以前から会費を免除され、私事で恐れ入りますが 5 年前に金婚式祝賀を行なつたことなど、敬老の立場にあることを自己紹介させていただきます。鉄鋼協会創立以来の会員であります、何等お役に立つようなこともいたさず、慚愧の至りであります。会の創立当時には、九州に在職しており、直接何もお手伝したこともありませぬ。若年技術見習生みたようなもので、諸先生先輩諸家のご努力される概況を聞き大変喜ばしく思いました。以下書き下します内容は、私自身の主観を元としおぼろげな記憶を綴つた小品に過ぎませぬ。

明治新政府によつて奨励された科学技術の振興や産業開発は、海外から輸入された科学技術は適当に咀嚼消化され、わが国独自の何ものかが産れつつあつたと思ひます。大学の充実整備とか学会協会の設立、研究機関の創設等が明治 30~40 年代に実現し、大正、昭和に推移するに従つて何れも増設拡大され分割細微されております。例えば、工業に関する最初の学会は、日本工学会であり、その細分されたものが機械学会、電気学会、工業化学会、日本鉱業会...でありました。日本鉄鋼協会は、日本鉱業会から分離独立し、後に鑄物協会、溶接協会、熱処理技術協会等が鉄鋼協会から分離独立しておりま

す。日本工学会を發祥としてその子その孫玄孫と系統され、大正、昭和時代は、その孫玄孫に相当する繁昌と思ひます。

鉄鋼協会が創立されたのは、大正 4 年 2 月で翌 3 月に会誌第 1 号が発行されています。最初は、発起人および理事制度で出発し、野呂景義博士が理事長として会を代表され、翌大正 4 年から 7 年まで初代の会長に就かれました。東京大学工学部教授俵国一先生を筆頭として多数理事の方によつて会は運営されており、事務の中心は、東京大学工学部冶金教室に置かれておつたと思ひます。

大正の初年頃には、わが国製鉄製鋼業界は、相当に完備され、経営面技術面ともに世界水準に接近していたと思ひます。釜石の如き、わが国製鉄の元祖を初め、官立八幡製鉄所は、その作業順調に進められ、拡張に次ぐ拡張の時代であり、また北海道輪西とか日本鋼管会社とかまた中小製鋼所等の創設される有様でありました。特に陸海軍の幹部諸將軍提督の間では、軍機の独立が強く主張されて独自の工廠で鋼材や兵機が製造され、また盛んに研究されておりました。従つて多数の専門技術者が全国に散在しており、官民ともにわが国の富国強兵主義を叫ばれた時でありました。鉄鋼協会設立の動機もまたこの社会情勢に順応したものと思ひます。

鉄鋼協会創設当時に、鉄鋼関係の専門技術者先輩諸先生で私共若年者がご指導を受け、会の創立に直接間接ご尽力下さつたと回顧されるお方を名簿(東京大学工学部冶金学科同窓名簿)から拾つて見ます。位階、称号、職

務、地位等は不確実な点がありますので一切省略させて頂きます。

*野呂景義殿(明治15年東大卒)、*的場 中殿(同前)、*渡辺芳太郎殿(同20年東大卒)、*今泉嘉一郎殿(同25年同卒)、*香村小録殿(同前)、*服部 漸殿(同前)、*横堀治三郎殿(同27年同卒)、*江藤捨三殿(同28年同卒)、*葛 蔵治殿(同前)、瀬尾 巧殿(同29年同卒)、宗像十郎殿(同前)、飯島懿男殿(同30年同卒)、川合得二殿(同前)、*高 壯吉殿(同前)、*末広忠介殿(同前)、*俵 国一殿(同前)、*中大路氏道殿(同前)、*桂 弁三殿(同31年同卒)、*斎藤大吉殿(同前)、*井上匡四郎殿(同32年同卒)、村田素一郎殿(同前)、*舟橋了介殿(同33年同卒)、*渡辺俊雄殿(同前)、河村 驍殿(同35年同卒)

(註)*印工学博士

このほかにも多数の大家がおられたと思いますが、私を中心としましたので、省略させて頂きます。皆様は全部

故人となられ、幽明境を異にしますが、現在の鉄鋼協会ならびに鉄鋼業界の隆昌をご照覧され、ご満悦のことと想像します。

現在のわが国鉄鋼産業界の発展は実に驚異的で、先輩故人方を初め私どもにも不可思議に堪えません。前掲しました如く明治大正時代には富国強兵主義、昭和戦時中には強兵強国主義が目標とされ、現在は大資本営利主義であるかのように思われます。これ等各時代を一貫するものは科学技術の発達要請が熱烈であつたことであると思います。創立当時の鉄鋼協会の内容と前述各時代のそれとを追懐しますとき、感慨無量なものがあります。本協会100周年記念大会が催されるであろう西暦2015年を夢想して更に更に感無量であります。今後の日本鉄鋼協会ならびに日本鉄鋼業界の弥栄隆昌発展を熱望祈願してこの拙稿を終りとします。

(正会員)